

ホームページに世界の大学戦略を見る

(24) アクレディテーションのアウトカムアセスメント

ミッションと個性にもとづいた 評価を重視

山田礼子 同志社大学教授

アメリカのアクレディテーション最新動向

2008年3月に公表された中教審が公表した『審議のまとめ』において言及されているように、今後は学士課程教育の構築に向けて各大学が自らの教育理念と学生の成長を実現する学習の場として、学士課程を充実させることが強く求められている。高等教育のユニバーサル化が進行し、大学の入学者選抜が従来のような入学者の質保証の機能を保持することが難しいことがそのおこな背景である。高等教育機関が自由を謳歌していた時代は過ぎ去り、かつてないほど高等教育機関が研究の成果のみならず教育の成果を求められるようになってきたのが近年の日本の動向であるが、この現象は日本だけのことではない。21世紀の知識基盤型社会に向けての人材の養成という目標に向けて、ほとんどの先進諸国の高等教育機関さらには開発国の高等教育機関が直面している課題といえる。

さて、教育の質の保証のシステムは国によっていろいろな個性がある。国家による質の保証の枠組みを構築しているイギリス、スコットランド型がひとつの例である。一方で、教育の質の保証に向けてのエビデンスを提示することが強く求められている環境のなかで、自己評価とピアレビューを基本理念に置くアクレディテーション団体による評価を維持しようとしているアメリカもひとつの例である。

筆者は毎年、IR（大学機関研究）の全米会議であるAIRに参加しているが、今年のAIRでの基調講演は全米の地域基準協会を傘下におくCouncil for Higher Education Accreditation (CHEA) と呼ばれるアクレディテーション団体の統括機関の会長、ジュディス・イートン氏によって行

われた。会長の講演の概要はAIRのHPに掲載されているが、連邦政府の統制がより厳しくなる状況のなかで、認証評価団体はどのように存在感を示し、かつ米国ならではの伝統とすぐれた特徴をいかにしながらアカウントビリティにこたえていくかという重たい課題がテーマであった。

<http://www.airweb.org/webrecordings/forum2008/Accreditation%2C%20Accountability%20and%20the%20Future.pdf>

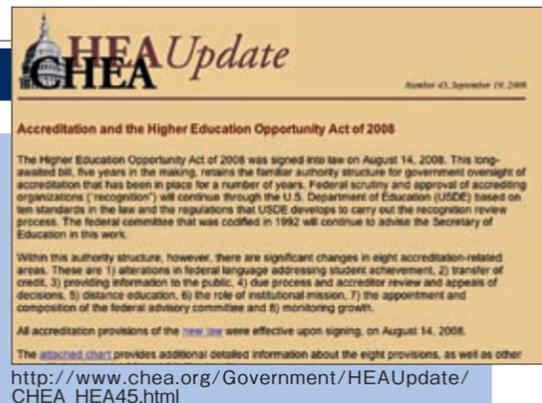
事実、2008年8月14日にアクレディテーションと高等教育機会に関する法が施行されたばかりであるが、アクレディテーションに関しては8つの領域において大きな改正がなされている。学生の学習成果をより明確に証拠として示すこと、単位の移転についてのポリシーを各高等教育機関が明確化すること、社会に情報を提供することをより明確にかつ公に行うこと等が定められているなど、連邦政府の関与がより厳しくなっている印象である。

http://www.chea.org/Government/HEAUpdate/CHEA_HEA45.html

今回は、アメリカにおいて連邦政府の統制が厳しくなる現在、地域基準協会がアクレディテーションに対してどのような方針を堅持しているかをいくつかの地域基準協会を例として見ていながら、次に大学の個性という視点からミッションと学生のラーニングアウトカムについて、グローバル性に力点を置いている大学を紹介することにしたい。

地域基準協会ごとに異なる評価基準

全米には6つの地域基準協会が置かれている。例えば、North Central Association of Colleges and Schools The



Higher Learning Commission (以下ノースセントラル地区基準協会)はCHEAとアメリカ教育省(USDE)による認証を受けている地域基準協会であり、おもに中西部地域を中心とする19州にある高等教育機関を管轄している。19州のうちモンタナ、ワイオミング、ノース、サウスダコタ州などは人口も大学の数も少ないため、実質的にはアクレディテーションが集中するのはミシガン、ウィスコンシン、イリノイ、インディアナ州等の中西部の州になる。地域基準協会にはそれぞれが管轄する州の高等教育に関連する歴史的な背景が多かれ少なかれ反映されており、それがアクレディテーションの方向性や基準に関連している場合も多い。ノースセントラル地区基準協会が管轄する多くの州の高等教育機関、特に公立大学はランドグラント大学としてスタートしているため、より多くの地域住民に教育サービスを提供することが基本という理念は現在でも共有されており、過疎州の人口の少ない地域にも十分に高等教育を提供することがアクレディテーションの際には重要な評価基準となる。

一方、南部州を管轄するSouthern Association of Colleges and Schools Commission on Colleges (以下SACS)の場合には、南部に顕著な人種問題、すなわちアフリカ系アメリカ人と白人との間の教育の分離という問題やそれに関連した貧困という問題を克服することが重要課題として続いている。したがって、教育の質の保証と学生への財政援助がSACSにとっては不可欠な課題であり、特に教育の質の保証のためには、かつては80項目以上のチェックリストを作成したり多様な基準を設定するなどの努力を行ってきた。SACSが管轄する州には他の州とは異なり、黒人学生のためのブラック・カレッジが数多く存在するが、こうしたブラック・カレッジは南部ならではの分離による教育の質の向上と機会の提供を達成する方法でもある。

Middle States Association of Colleges and Schools Middle States Commission on Higher Education (以下ミドル・ステート)と呼ばれる中部地区基準協会は、ニューヨーク、ペンシルバニア、ニュージャージー、メリーランド、ワシントンDC、デラウェア等の比較的大学の多い州に加えて、プエルトリコとUS領バージンアイランドを管轄している。ノースセントラルとミドル・ステート地域基準協会の質の保証についてのアクレディテーションの基準は類似している点も多い。いずれも質の保証をInstitutional Effectivenessという概念からのアプローチで評価している点は同じであるが、ノースセントラルが科目レベル、プログラムレベル、機関レベルという3つのレベルにおいて評価しているのに対し、ミドル・ステートは科目レベル、機関レベルという2つのレベルにおいて評価している点に差異がある。

ラーニングアウトカムによる評価

このようにそれぞれの管轄州にある大学の歴史と抱えている問題や現状の違いが各地域基準協会が実施するアクレディテーションの個性になっている。しかし、個性と同様に、すぐれた教育の質の保証と、各大学や各コミュニティ・カレッジが自己点検・評価にもとづいて教育の質の保証を実践していくことは共通である。また、地域基準協会は質の保証を先述したInstitutional Effectivenessという言葉で表現している。つまり、質の保証を一律的、あるいは一元的な方向性で定め、枠をはめるのではなく、各機関がその機関に応じたミッションを定義し、目標を設定し、達成することを推進していくことが基本となっているわけだ。例えば、学生のラーニングアウトカム(学習成果)や財政面の健全性や効率性について、エビデンスを示すことが不可欠であるが、その場合、各大学によって多様な方法や指標でエビデンスを示すことができれば良いとしている。

専門教育やプログラムの成果の評価においては、専門職協会がより関与しているため、地域基準協会の管轄の範囲であるというわけではない。地域基準協会が評価しなければならないのは、一般教育分野であるが、ここでのラーニングアウトカムの提示においても各大学や機関が取り入れている方法を基本としているのは6つの地域基準協会に共通の理念である。

例えば、一般教育の標準試験であるCLAもそのひとつの

ツールに過ぎず、必ずしもCLAをアウトカム評価の尺度として取り入れる必要があるわけではない。CLAは学生全体に実施するのではなく、100人という人数で実施してその成果を示しても良いとされている。そのため4000人の学生規模の大学が優秀な学生100人を選抜してCLAを受けさせた結果を提出すると、小規模大学での100人の成果とでは、同等に比べることができないというテストの妥当性や信頼性の問題がクリアできていないことと、コストがかかるという問題も依然として残っているからだ。

したがって、CLAだけでなく、キャップストーンプログラムの導入、面接評価として有効である各種学生調査の利用、カリキュラム・マップの活用、eポートフォリオの利用、ルーブリックの活用など多種多様な方法でその大学に適している方法を利用して成果を上げれば良いという姿勢を、連邦政府の圧力が強まる状況においても各地域基準協会が堅持しようとしている。

新高等教育法でも遠隔教育についてのアクセディテーション条項が付け加えられていることからみられるように、多くの機関がeラーニングによる遠隔教育を導入するようになってきていること、地域基準協会も積極的に遠隔教育を評価する方法を開発するようになってきていることも新しい動向といえるだろう。また知識基盤社会への対応については、ボローニャプロセス以後のヨーロッパの高等教育機関の動向をアメリカもかなり意識しており、留学生確保に並行して、自国の学生の国際化に力を注ぐようになってきている。具体的には、グローバリゼーションへの対応として多くの大学が学生に短期、中期、そして長期の海外体験をさせるようになってきていることが最近の動向である。したがって、こうした新しい教育方法や教育プログラムの成果が学生のラーニングアウトカムの目標として掲げられているようにもなっている。

以下では、各大学の個性やミッションという点から学生の海外での体験を通じてグローバルマインドや知識の習得をラーニングアウトカムとして掲げている大学の事例を見てみよう。

アーケディア大学の取組み

ペンシルバニア州グレンスライドにあるアーケディア大学は学生数4000人ほどの中規模私立大学であり、教員と学



生比率は1対13という少人数教育を大学の長所として掲げ、実際の平均クラスサイズは学生数16人である。本大学は全米の高等教育機関の学生を対象とした海外教育プログラムと自校の学生を対象とした海外教育プログラムの両方を提供しており、学生の国際化を大学のミッションのひとつとして設定し、そのためのプログラムを積極的に展開している大学である。<http://www.arcadia.edu/>

産業界、一般人が利用する大学ランキングのひとつにU.S. News & World Report誌が毎年行うランキングがある。2008年度版ランキングにおいてアーケディア大学は北部地区の修士号授与大学のベスト25大学のひとつ、そしてベストスタディ・アブロードプログラム提供大学として選定されている。U.S. Newsランキングは、複数の研究や教育の質を評価する指標をもとに算出されている。そうした指標は同僚性による大学同士によるピアレビュー、学生のリテンション率、教員集団の質、学生の選抜度、財務の健全度等から構成されている。アメリカにおいてはアクセディテーション機関も一般的なランキングを無視しているということではなく、大学がミッションと目標を立てて、それにもとづいてInstitutional Effectivenessを評価する際には、そのすぐれた点をアセスメントするということになるため、しばしば一般的なランキングとアクセディテーション機関による評価が重なることも少なくない。

国際化プログラム3つの強み

アーケディア大学の強みは、大学の目標として打ち立てている学生への国際化プログラムの充実にもなっており、学生がグローバルな視点や教養を獲得しているということにある。国際化プログラムの特徴は、①初年次生や転入・編入学生の多くがロンドン、スコットランド、アイルランドで海外研修を経験する。②短期間から長期間の多様な海外体験あるいは留学プログラムを提供して

いるため、学生は目的やニーズに合わせて多様なプログラムの中から選択することができる。③単に体験だけで終わらせないために、事前知識の習得と体験、事後学習をすることによって、学生がアウトカムを獲得できるような教育課程を提供している。という3点にまとめられる。

特に③については、学生が個別の海外体験プログラムを海外研修アドバイザーとの相談の上、組んでもらうことも可能であること、教員が提供している海外研修で行く国に関する科目を履修することにより体験と知識を統合するような設計がされている。具体的には、例えば環境やビジネスというテーマのもとで、学生がパナマを事例に学ぶことを考えている場合、どのようにこうした知識と体験の一体化は進められていくのだろうか。学生は事前学習として、中南米の経済を専門とする教員が提供しているパナマスタディ・アブロード関連科目という知識に関する科目を履修する。この科目では、パナマ経済やパナマ社会等についての基本的な知識とアメリカの産業界との関連性について学ぶ。次に、海外研修プログラムに参加するが、知識に相当する科目を担当している教員が同行してパナマで実際に何週間かを体験する。現地にはプログラムコーディネーターと呼ばれる職員が滞在しており、その職員が現地での体験学習の場をセッティングし、学生はその研修の場に参加する。現地に進出しているアメリカ企業のビジネスの現場や多国籍企業の活動状況などを見ることによって、グローバル化した企業活動という視点で学習する場合もあれば、現地社会や現地の人々への多国籍企業の影響や環境問題という批判的な視点からグローバル化した経済を見るときといった学習も可能である。<http://www.arcadia.edu/curriculum>

最近では先進国よりも開発国への留学・研修プログラムを希望する学生も増加しており、卒業後はアーケディア大学にある平和構築に関する大学院プログラムや国際関係の大学院プログラムに進学する比率も増加しているという。

アーケディア大学における従来の留学・研修プログラムは、どちらかといえば長期留学に重点を置き、体験といった要素は学生の自主性に任せていた。しかし、アウトカムを重視するようになってきている最近のアクセディテーションの動向に適応する形で、本大学の学生の

ラーニングアウトカムの目標にグローバルマインドの育成を掲げたことが留学・研修プログラムの大幅な改革へとつながった。短期・中期・長期という期間別のプログラムの策定と設置、それに合わせた授業科目の設置と体験的要素を充実させた研修内容というように、ラーニングアウトカムを獲得できるように再構築されたことがまた大学の個性へとつながっているといえるだろう。

プログラムを全米の学生にも提供

アーケディア大学の個性ある国際戦略は自大学の学生への留学・研修プログラムだけに留まっていなかった。全米の学生のための留学・研修プログラムセンターを、アーケディア大学内に設置し、全米の学生のグローバルマインドの育成に向けての留学・研修プログラムを学生のニーズにあわせて情報と実際のプログラムを提供している。1年間に全米の300に上る高等教育機関から3000人の学生がアーケディア大学のArcadia's Center for Education Abroad (<http://www.arcadia.edu/abroad>)が提供する留学・研修プログラムに参加している。このセンターの提供しているプログラムの特徴は、留学・研修を希望する学生の専門分野や学びたい分野にあわせて専門の職員がプログラムをカスタマイズするという点にある。したがって、お仕着せのプログラムではなく国際経験が豊富なスタッフのアドバイスや支援を受けながら、学生は希望に沿ったテイラーメイドの留学・研修を行うことができる。

アーケディア大学のターゲットを絞った国際化戦略とグローバルマインドの育成というラーニングアウトカムに焦点を当てた個性的なプログラム構築には、管轄アクセディテーション団体であるミドル・ステート地域基準協会も注目しているということだ。

今回は、アウトカムのより具体的なエビデンスの提示に向けて、連邦政府の圧力が強まるアメリカのアクセディテーションの動向と大学の事例を紹介してきた。日本においても同様の傾向が進展しているが、一律的なアウトカムではなく、大学のミッションと個性に応じたアウトカムを尊重するアクセディテーション団体の方向性と個性的な大学の戦略は、しばしば同一方向を追い及ちな日本の高等教育機関にとっても参考になる点が多いのではないだろうか。